

第4回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

(1) 報告事項

- ① 令和5年度札幌市教育費予算について
- ② 第3次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査結果について
- ③ サッポロサタデースクール事業 令和4年度実施報告

(2) 協議事項

協議テーマ「学びに対する無関心層にどう働きかけるか」

2 日時

令和5年3月16日（木）10時00分～12時00分

3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

4 出席者

(1) 委員（参加者計10名 対面参加8名、オンライン参加2名）

対面参加：鈴木委員、出口委員、一戸委員、臼井委員、高橋委員、
中野委員、出葉委員、本間委員

オンライン参加：榊委員、安田委員

(2) 事務局（8名）

木村生涯学習部長、村上生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、逸見推進担当係長、釜石社会教育担当係長、中原職員、三津橋職員、山下職員

5 開催形態

公開（マスコミ関係者1名傍聴：北海道通信社1名）

6 会議内容

(1) 配布資料

資料1-1、令和5年度局別施策の概要（教育委員会関係分）

資料1-2 社会教育関係団体への補助金の交付について

資料2 第3次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の結果について

資料3 サッポロサタデースクール事業令和4年度実施報告

資料4 社会教育委員会議議論の記録（案）

(2) 報告事項

①令和5年教育費予算について

○事務局（木村部長）

事務局から「令和5年度局別施策の概要」、「社会教育関係団体への補助金の交付について」を用いて報告

②第3次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の結果について

○事務局（小柳係長）

(ア) 事務局から「第3次札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の結果について」、その他、補足資料を用いて説明

(イ) 主な意見・質疑応答

○中野委員

アンケートのやり方の問題の質問。各問いに対しての回答の数が、冒頭で1,679通あったが、返答率は100%、問いによっては20%しかないところもある。これは、アンケートの仕方によって、この全体数が変わるというふうな考えなのか。要するに、答えてもらえなかったということか。

○事務局（小柳係長）

問いによっては、無回答だった方ももちろんいる。大きく問2番などは、生涯学習をしていると答えた人にお聞きしますということなので、全体からさらに答える質問が減っていたり、何々と回答した人に、またさらにお伺いしますというような前提があって、回答の客体の数が減ったりしているという状況。

○出口委員

この先、これらのデータをクロス集計などされる予定はあるか。今ぱつと何と何を引っかければいいのかというのが思いつかないが、これだけのデータが集まれば、何らかの傾向が見られると思う。

○事務局（小柳係長）

今の状態では、指標にしている現在の生涯学習に取り組んでいる人の割合をお聞きした問2の設問、それから学習の環境の満足度を聞いた問4の設問、それぞれ各設問にクロスをかけて、それぞれの取組がどういうふうに貢献しているかというようなことを、この後細かく見ていけるように、一旦は集計の形にはしているが、当然データも手元にはあるので、この後必要な、こことここを掛け合わせて見てみたいとか、そういうところについては、随時データを活用しながら検討していけるような状況。

○出口委員

この問2-6、7と2-8をクロスして、活用した人は学びを通じてつ

ながりが得られたかというようなクロスなどもできると思う。個々に見ていけば、幾つかクロスできるのではないかと思う。せつかくあるデータなので、有効活用してほしい。

③サッポロサタデースクール事業令和4年度実施報告について

○事務局（釜石）

（ア）事務局から「サッポロサタデースクール事業令和4年度実施報告」を用いて説明

（イ）主な意見・質疑応答

○鈴木議長

アンケート調査の回答で、来年度の実施意向について、今年度実施校のうち、継続を予定している学校が26校となっている。今年度の実績28校のため、2校は来年度実施する予定がないのか。

○事務局（釜石係長）

現時点では検討するというところ。

○鈴木議長

内容とかに関するものではなくて、運営面だとか、ちょっとした課題があつて、続けたいのだけれども続けられないということか。

○事務局（釜石係長）

この時点では、予定していると言えなかったという状況。

○鈴木議長

何か、言えなかった理由が、お分かりになれば教えていただきたい。

○事務局（中原職員）

今回2校ほど回答いただけなかったが、いずれも連携して取り組んでいる学校だった。その当該2校が、主体校ではなくて、どちらかというサポートで入っている学校。もともと計画時点では、連携して取り組むということであったが、今年はコロナの影響があり、どちらかという、そのサポート校のほうの活動があまりなされなかった。そのため、現時点で、今年度のいわゆる活動実績があまりなかったというところで、来年度は今のところは検討しますといった解答。

○鈴木議長

調査により得られた意見の中で、活動を通じて感じた効果についての回答がある。その上位に、①地域との連携の強化、②教職員の負担軽減が上げられているが、連携強化については、やはり本来の目的というか、地域への広がりという意味で、これが最上位ということで非常によかった。また、これまで課題として上げられていたが、学校や教職員の負担というこ

ともあって、なかなか実施に踏み切れなかった学校もあったと思うが、2番目にこの負担軽減がなされたという効果が上げられていて、これはもっとやりやすいようにと、拡大方策を立ててきた中での非常に大きな効果であり、よかったと思う。

○高橋委員

アンケート調査の回答で、対象が296校に対して、回答は245校というのは想定内か。

○事務局（釜石係長）

サタデースクール事業をしていない学校もあり、リマインドの連絡はしているが、ある程度は想定内。

○出口委員

調査により得られた意見の最後のところに、地域の意向はやや強いが、連携して実施できたというのは、具体的にどんな状況なのか。

○事務局（釜石）

地域が一生懸命やってくれていて、学校があまりサポートしなくても、割と自立している運営協議会だという印象がある。実際、学校の先生が多くを担っているところもあるが、地域がほぼ自立しているところは、休日の実施であっても、先生方の手をほとんど借りずに実施されている。そういった活動をしている学校が解答したという印象。

○出口委員

上から目線で、モンスターになりつつあったら困るなどと思うが、そういうことではないか。

○事務局（釜石）

そういう感じではない。どちらかというところ、地域が主体的に活動していて、学校があまり関わる機会が少なかったという印象を持っているのかもしれない。

○本間委員

アンケート調査で得られた意見について、回答した245校の約9割以上の学校が、地域との連携・協働体制構築が必要だと感じるというのは大きな結果。ただ、それを実施している、活動をやっている学校が少ない。

今まで地域の方々というのは、見回りとか安全面とか、どちらかというところ、学校のサポート役的な仕事が多かったと思う。245校のうち多くの学校授業等におけるゲストティーチャーだとか、職場・職業体験の実施といった教育課程に関わることを、地域に担ってほしいと願っているのであれば、もう少し実施を検討する学校が増えてもいいと思う。

必要があると言いながら検討もしていないというのは、まだ十分に、その

真意が伝わっていない、そういう機会がない、余裕がないということが考えられる。まず、そういう新しいことをしたときは、学校側は教職員の負担を考える。今でも大変なのに、さらに大変になると思われがちだが、この成果を見ると、実は実施した学校の回答で、上位2つ目に教職員の負担軽減というのが出てきており、このあたりを48校に対してはアピールする機会があればいいと思う。また、検討を予定している学校に対しては、市教委による個別支援や研修の開催により実施実現につなげていくと書いているが、これは具体的にどんな予定をされているのか。

○事務局（釜石係長）

個別支援については、今年度も希望校には行きますよというアナウンスをしていて、何校かお邪魔して、ほかの学校でうまくいっている事例や、職業体験とか、進路探求学習のときに地域の方をお願いして、こういうやり方をすれば、この事業使ってできますよといった具体的な手法をお伝えしてきた。

あと、研修については、今年度は年度末になってしまったが、そのときも検討する学校に参加いただいた。その研修の中で、実際コーディネーターをやっている方に説明いただき、今年平日こういうふうに授業でやりましたとか、今までは先生が直接地域の方をお願いしてゲストティーチャーをやっていたが、今年はコーディネーターのつてを使いながら、講師を増やしてやりましたといった実績報告などをしてもらった。来年度も実施を検討している学校が参加できるような研修を企画し、回数を増やしていきたい。

○鈴木議長

確かに、9割以上が必要だと感じているというデータもあり、実施検討の48校、貴重な次にやっていただく可能性が高いということもあるため、何がハードルになっているかとか、どういったところでとどまっているのかというのを聞きながら、働きかけるというのが重要だと思う。

○安田委員

相変わらず区によって偏りが多いなというのを感じている。私は豊平区で活動をしているが、今回の実施校を見ても、小学校では豊平区が少ないのと、あと白石区が全くないという状況を見ると、区によって偏りが多くなってきている。白石区とか豊平区なんかは、割と貧困などの問題を抱えた子どもたちの多い地域でもあるので、そういうところにこういった活動がせっかく拡大をされて、いい効果が表れているので、何とか少ないところに実施校を増やすなどしてほしいと感じる。

例えば、当番制にするとか、そういったことは考えてはいないのか。当番制で小学校に回していくとか、そうすると学校側も職員の負担が激しくなるの

で、周りの地域団体とかを巻き込んで何とかしていこうという努力をし出すのでないかなという感覚はあるが、そういう考え方とかも取り入れたらどうなのかなと思う。

○事務局（釜石係長）

白石区は今回実施を予定している学校があった。当番制のイメージが、わかかなかったが、どういうイメージで御提案されたか教えていただきたい。

○安田委員

例えば、以前から西区がすごく多かったが、札幌の区でも、本当に偏りが多い中で、どんどんと新規というか、新しくこういう取組をしていく小学校とか中学校が増えていかなければならないと思うのだが。毎回同じ小学校・中学校で同じことをされているのではなくて、どんどん新しいこういった活動を取り組んでいく学校が増えてこそ、よさなのかなと感じている。そのため、今年は、何々小学校、何々中学校がサタデースクールを取り入れてくださいという感じで、そこに予算を持っていくみたいな、そういったもう強引に投げかけるということとはできないのかと。

○事務局（釜石）

イメージ分かりました。

なかなかこの学校教育の教育課程で何かやるというのと違うので、こちらから、ぜひやってくださいというお願いはするのですが、無理やりというのは難しいところ。ただ、札幌市全体として、この地域と学校の連携という取組は進めていく方向で教育委員会全体が動いておりますので、そのあたりは学校教育部門と連携しながら一緒に活動していきたいと思っている。

○鈴木議長

以前少し意見としても出ていたような気がするが、場合によっては、何かモデル校みたいのを設定して、地域コーディネーターとかいると思うが、その候補になるような方に見学してもらった必要があるかもしれない。盛んにやっている、あるいはノウハウがある学校で、コーディネーターをやられている方っていろいろな活動されている方が多いため、その辺を派遣して、1回やってみると。見学して、我々にもできそうだということで、では来年度ちょっとやってみようかというような話にもつながりそうな気もするため、何かモデル校と言ったらいいのか、名称はいろいろあるかと思うが、そういうのも一つ手かなというふうに安田委員のお話を聞いて思った。

○出葉委員

学校の立場から、状況を話させていただければ。解決策だとか、改善策というよりは、今話題になっていたようなことに対して、現場の感覚のようなものを少しお伝えできればと思う。

学校としては、ここのアンケートの回答にもあるように、学校が抱える課題だとか、働き方改革であるとか、開かれた教育課程であるとかということで、地域連携ということに対する問題意識は、少なくとも私たち管理職レベルの教員たちは皆、担任たちもそうだが持っている。課題として持っているし、これから学校はこういうふうになっていくべきだということについては、コンセンサスになっていると思う。

ただ、このサタデースクールだとか、そういった取組の実現性は、様々な地域性や学校事情があると思うため、それは区というレベルかどうかは別にして、学校が置かれている状態や歴史的経緯みたいなもの、つまり地域との結びつきが大変長い、開校以来随分たつような学校、そうでない学校で異なってくると思う。

例えば、サタデースクールが平日に行われる以前から、地域との結びつきでさまざまなゲストティーチャーが派遣されるようなことを日常的に行っているとか、地域との結びつきが既に日常的になっていて、地域の誰に頼めばこんなことしてくれるみたいなのがずっと引き継がれている学校では、あえてここに手を挙げなくても運用されるというようなケースもある。逆に手を挙げて、すぐにあの人に頼めばコーディネートをやってくれるなということがイメージできる学校もあると思うし、誰に頼んだものやらとかというような実情の学校もあると思う。そう考えると、どういうふうに進めれば、誰に頼めばということがイメージしにくい学校では、なかなか手も挙がりにくいと思う。例えば、先ほど話題になっていたようなモデル校のような形で、働き方改革という面で言えば、例えば教員たちは、教育課程の外側で、担任外か、教頭先生とかがある程度携わって、立ち上げのときには一汗かかなければならないが、コーディネーターのような方ができて回り始めれば、今まで先生が全部窓口になってやっていたことが、そちらのほうに委譲できれば大変ありがたいと思う。なので、どういうふうアプローチすれば、そういう取組ができていくのかというモデルを示していただくのが、有効であると感じている。

あと、先ほど話題になったコミュニティ・スクールが現実問題として取り入れていくということであれば、以前やっていたこと、あるいはこのサタデースクールの取組が、今後コミュニティ・スクールの中にどう位置づいていくのか、どこの学校も、これは今課題性を持って取り組んでいるので、それぞれの学校事情に応じてどういうふう実現していくか、すぐにできそうな学校、それからちょっと一汗かかない立ち上がりそうもない学校などについて、モデルを示していただく、あるいは、グランドデザインを立てやすいようなヒントをいただければ、学校現場としても動きやすいのかなと感じ

た。

○事務局（釜石係長）

コミュニティ・スクールのほうを整えていく教育課程担当課と私たち生涯学習推進課、いま、一緒になって動いているところ。学校が新たなことを何かしなければならぬ、何か活動しなければならぬというようなアプローチの仕方ではなく、今ある、やっていることをどうやって地域の方と連携しながら有効に活動に結びつけていくか、そういったようなところをつなぎ合わせていくことを、今年度特に力を入れて進めていくというふうを考えているため、今後ともまた皆さんの御意見を伺いながら学校と地域の連携、教育委員会の中でも学校教育部と生涯学習部、調整しながら進めていきたい。

○鈴木議長

以前こちらの社会教育委員の視察で手稲区の小学校にお邪魔したときに、宿題とかやるそういったプログラムで、本学の北星のボランティアサークルにお世話になっていましたと言われた。それで大学生のボランティアサークルが入って子どもたちに勉強を教える、そういった例もあったり、あと、本学は大谷地の小学校が近いが、英文科のあるゼミが英語を教えるみたいで、小学校にゼミの学生が出かけて行って教えるというような授業もある。コーディネーターというと、地域のある活動的な方というイメージもあるが、場合によってはそういったボランティアサークルだとか、大学も地域貢献、社会貢献で地域の方といろいろやっているということもあるため、少し大学だとか専門学校なども、ちょっと形は違うかもしれないが、ある意味地域コーディネーター的な役割を担っていただくことが考えられる。このサタデースクール、今度名前が変わるが、学校も人は代わるが、教員は基本的にはいるだろうし、また、学生も年代とともに変わっていくが、サークルであれば、ずっと継続して残っていくため、そういうのも仕組みとして少し考えてもいいのかなと思った。

○中野委員

年度当初より、市PTA協議会から各PTAにサタデースクールというのがあるのでよろしくという話をさせていただいた。恐らく学校単位のPTAでは、このサタデースクールがあるというのは、かなりの高確率で皆さん認知されている。今後始まるコミュニティ・スクールとPTAの関わり方についても私なりに勉強しつつあるので、それを前提に、現在この25の運営協議会のうち、どれくらいの内容、どれくらいPTAが関わっているのかなというのが知りたい。実際私もいわゆる地域の立場で1つサタデースクールをやったときに、PTAとのコミュニケーションにかなり気を遣ったというのがあったため、そこを少し教えてほしい。

○事務局（釜石係長）

元PTA、現PTA、どちらかは必ず入っている印象。PTAが関与していないという印象はない。ただ、現PTAではなくて、元PTAしかいないという学校も何校かあったような気はする。地域の方は必ず入れてくださいとなっているので、学校主体で始めるときに、特に地域の方として真っ先に思い浮かぶのがPTAのようなので、PTAが入っているという印象だった。PTAが入っていないというところは、少ないと思う。

○中野委員

ほっとした。

地域学校協働活動推進事業に名称が変わりますよというのを含めて、引き続き市PTA協議会のほうから区のPTA連を通して、積極的に参加していただきたいと伝えていきたい。

(3) 協議事項

「学びに対する無関心層にどう働きかけるのか」

○鈴木議長

既に御案内のとおり、来年度は社会教育委員の改選年に当たり、現在の10名で協議を行うのは最後になる。そこで、事務局では、この2年間の議論の内容を取りまとめた。

○事務局（村上課長）

今期の社会教育委員会議の進め方については、昨年度の第1回の会議において、喫緊の社会情勢等に即したテーマを取り扱い、自由な視点から議論をいただき、2年間の議論の経過を議事録集といった形で取りまとめるということとしていた。本日の会議をもって、協議テーマにつき議論を行うのは、最後となる。

そこで、前回までの協議テーマに関する議論をまとめた資料を、議論の記録の案として作成をさせていただいた。

最初は、「人生100年時代と生涯学習」というテーマから議論を始め、人生のライフサイクルを踏まえ、各世代に応じて必要な学びについて意見をいただき、そこから三つのキーワードを整理した。「つながりを生む学び」、「学びから実践へ」、「学びの工夫」という三つのキーワードを踏まえて、さらに意見をいただいた結果、まずは学びに対して、興味関心を持ってもらうということが大事であるということから、学びに対する無関心層にどう働きかけるかというテーマで、さらに議論をいただくということになった。

参考に、札幌市図書館を視察し、さらに意見をいただいた結果、何点

か重要な示唆というのをいただいた。

本日は、こうした議論の経過を踏まえ、最後に総括的な意見がほしいと考えている。その内容を最後に記載して、この2年間の議論のまとめという形にさせていただきたいと考えている。

○臼井委員

人生100年時代の生涯学習ということで、それに対して、札幌市生涯学習推進構想におけるアンケート調査の結果というところと照らし合わせながら見ていた。難しいのは、アンケート調査の結果というのは、実際には5,000名の中で回収が1,679通、33.6%、ほぼ3分の1。こういったアンケート調査というのは、特に近年、回収率というのは、非常に低下している。これはそれぞれの調査に対する個人情報の問題であるとか、あるいはインターネット調査を含めて、実に多くのアンケート調査が多くなっているので、回答数というのを増やす必要があるのだろうなと感じる。例えば私が学生時代アンケート調査をやったときはいろいろなチームによって、このチームは何%の確率で回収しているから、もう少しこのチームを高めようとか、そういうようなことをやっていた。生涯学習や活動の目的というところで、平成17年から平成22年、27年、令和4年と各年同じ質問をして、その中で増減があるものというのをちょっと注目して見ていた。そうすると、この生涯学習活動や活動の目的ということで言うと、「趣味や楽しみのため」というのは、51.8%で最も高い。これは大体ずっと同じくらい、約半数の人が「趣味や楽しみのため」というのを上げている。ということで言うと、注目しているのは、「知識や教養を高めるため」というのが各年ずっと増え続けていて、ついに41.5%になって、令和4年度では2番目になったということ。

逆に、減っているのが、「友達や仲間づくりのため」。これがどんどん減ってきているということで、このあたりはどうなのかなと思っている。

今回の議論のテーマが、無関心層に対してどのようにアピールするかということを考えて、生涯学習であることから、本来的な知識や教養を高めるためと、これは本質価値みたいなのところがあると思う。友達や仲間づくりのためというのは、もっと上がっていかねばいけないと個人的には思っている。コミュニティーであったり、あるいは自分たちの言ってみれば孤独感とか、孤立感みたいなものを、もっと自分が社会の中にいるとか、仲間を支えられているというような意識みたいなのところを感じられると、その友達や仲間づくりのため、これが目的なのか結果なのかというのは別にしまして、生涯学習をすると仲間が増える、友達が増えるというのは、もう少しアピールしていくべきことなのでないかなというふうに思う。例えばコロナの影響

でなかなか人々の孤立感というのは、何年間か高まってきたときでもあり、何かこの仲間づくり、友達づくりという部分をもう少しアピールしていくような生涯学習というのは、方策があるのではないか。非常に生涯学習で教養や趣味というのを高めたり広めたりするというのは、言ってみれば当たり前のことであって、むしろそういったところから出てくる効果、生涯学習の効果みたいなところで、友達づくり、仲間づくりというのを広くアピールできる部分なのではないかなということも思っている。少し力を入れて、生涯学習のPRでも、実はこういうことが広まったのだとか、こういう仲間ができたのだとかというのは、人生100年時代においては、支え合いとか一緒に何か楽しみをつくっていくみたいなのところと言うと、非常に大事なのかなということも思っている。それが年を追うごとにどんどん減っている。そのため、力を入れるべきなのではないかなということも思っていた。

○榊委員

私も同じ考えを持っており、学びが個人化しているというところが問題というふうに思っており、友達、仲間づくりというところは、もっと上がってもいいというふうに思った。

その友達とか仲間の中身について、例えば50代は50代、60代は60代というふうな輪切りで仲間になるのではなく、多世代でつながり合えるような何か仕掛けがあると、もっと豊かな人生になっていくと考えている。

一方的に教える、学ぶというふうな関係でなく、教え合い学び合うという関係をつくる時に、多世代ということが1つキーワードになってくるのかなと感じている。

○高橋委員

アンケート調査から見て、自分が高齢者のため、若い方の望むものと高齢者は、全く違うのではないかというのを、このアンケートを見て感じた。やはり年代ごとに興味や関心も違い、生活の状態も違うので、若い方なら生活に密着したものとか子育てが必要だろうし、高齢者になると、IT技術が知りたいとか、あとは健康のことが心配だとか、友達づくりと言うよりも、そこに行って知り合えるということ、目的にはしていないのかもしれない。同じような目的で集まった人が友達になっていくと感じる。

インターネットがいいという年代と、スマホすら使えない人も多いが、紙媒体がやっぱり必要ではないかと思う。社会教育は、ある程度のその年代その年代に合ったようなものをつくってほしい。

○中野委員

無関心層にどう働きかけるかというところで、誰しも趣味・興味が何も無いという人は、恐らくいないのだろうと思い、ただそこに何かやろう、新し

いことをやろうと思うと一歩踏み出す機会をどうつくるかなのかなと思う。例えば南区民センターで合唱サークルとかがある。ネットで検索すると例えばコーラス何とかというサークルがありますよと出てくるが、(サークル名が)出てくるだけ。実際どういう活動をしてどういうメンバーで、どういう年齢層でというところの情報がわからない。

恐らく区民センターに行けば、募集の紙が貼ってあって少しは書いてあると思うが、こういうできる、できないではなく、その区民センターレベルのいわゆるオンラインで言うところの話だが、もう少し詳しく活動内容が紹介されているといいのかなというふうに思った。区民センター的には、こういうサークルがうちの区民センターでやっていますよというところで終わっていると思うが、そこにもう一歩踏み込んで、メンバーの募集かけるというインフォメーションが、要るのかなというふうに感じた。

○鈴木議長

無関心層に働きかけるかということだが、1つの重要なキーワードとして、やはりきっかけだというふうに思っている。

無関心層も、やはり何も関心ないというわけではなく、参加していないということで、無関心層というキーワードにはなっているかとは思いますが、何か自分で気づかない関心もあるかもしれない。そういうことでやはりライフスタイルが非常に多様化している中、どこに引っかかるか分からないという面があるかと思う。そういった中で、区民センターとかでやっている講座とかとは別に、区民協議会だとか、何かまちづくり協議会だとか、そういったところの公的なところがそういう仕掛けをするということになるかもしれないが、何かいろいろな仕掛けをしていくというのが非常に重要かなと思っている。

厚別区、地元青葉出身の映画監督がおり、せっかく我がまちが生み出した映画監督の映画を地元で放映してみようとなったら、映画好きの方が、今まで参加していなかった方がボランティアで続々参加してくれた。そういったことでいろいろ仕掛けるとというのが一番いいのではないかなと感じる。

もう1つは情報伝達、伝えるということだと思う。既存のやり方が悪いということではないが、同じようなやり方ばかりしていると無関心層に関してはマンネリ化というか、また同じような感じだろうということで、目が向かないような気がする。アンテナに引っかかってこない。そのため、これといった具体的な意見はないが、インターネットだとか、情報の伝え方をいろいろと変えてみるのが非常に重要だと思っている。

○出口委員

このアンケートの中で、知識や経験の活用という部分で、ボランティアの

数字が8%にとどまっているというのが寂しい。この数字がほとんど変わらずにきているというのも、何か次の行動が必要になってきていると思う。

サタデースクール、地域学校協働活動の取組を広げていくことになると思うが、コミュニティ・スクールを導入したら、そこで子どもたちの課題はなんだとか、それからどういう子どもに育てたいかということを含めてみんなで議論する中で、こんな経験を子どもたちにしてほしい、そのためにこういう支援活動が必要というようなサイクルで協働活動がどんどん広がっていく。今までの協働活動というのは、ある程度校長先生と地域の関係があるところの学校が手を挙げて取り組み、行って来たと思うが、コミュニティ・スクールが動き出せば、各学校で地域の方々の意見を踏まえながら、こんな支援活動が必要だということで、違う観点で取り組みが広がってほしいと思っている。学びっ放しで満足している人たちが必ずいるのだけれども、それをどうやって生かすかというきっかけ、発想をどう植えつけていくのかというのがとても大事なことだというふうに思います。

○出業委員

生涯学習、あるいは生涯学習を考えたときの学びの無関心層にどのようにアプローチするのかということについて、私は学校にいるため、これまで学校にいながら子どもたちが学ぶ動機ってどういうことなのかということを考えさせられることがたびたびあった。子どもに説明をせざるを得ない状況というのもよくあった。何で勉強するのですかという。幾つか学者さんとかが分けたりしているが、例えば褒められるからだとか、それから何か買ってもらえるとか、そういう外発的なのとか、合理的な部分もちろんあるけれども、自分がこういう人になりたいだとか、こんな仕事をしたいとかいう内発的なものもあったり、それで内発にもいろいろあって、何かに役立つとか、それからこんなものが欲しいからとかというだけではなくて、学ぶこと自体が楽しい。

例えば、算数教育に長く関わってきたけれども、小学校の算数は生活に使えるからとは言いながら、中学校、高校ぐらいになって、微分積分でどこに生活で使うんだみたいなことをよく言われて、何でやるんだという説明のときに、いやいやと、役に立つとか、買物できるからという以外に、数や図形を考る、論理的に物事を進めることって面白いよねという、その学ぶ中身自体に楽しみを設けていく。自分が向上しているとか、分かる喜びだとかということでも学ぶということもある。

外発・内発や動機も様々な種類があるが、そんな説明が幾つかある中で、よくよく考えると、今生涯学習で何かをするときに、趣味や好きなことで、自分が楽しいからとか、自分が知的に高まっている喜びだけではなくて、そ

のことが何かに役立つだとか、社会に役立つだとか、人に役立つだとかという形で生かされるということの実感があるということも必要な世の中になっている。なぜならば、それは100年時代だからということで、私も今年60代の所与の年限は終えるが、まだまだ働かなければだめだというような感じで、さし当たり来年からも働く予定をしているが、まだ元気なのでやれというような感じ。そうすると、今後私たちが経験してきたことをどういうふうに役立てていくのかということを考えていたりする。ところが今子どもたちには、既に決まっていることを、このとおりにたくさん覚えなさい、それで丸もらって点数上げなさいというような学力観から、世の中どんどん変わるのだから、いっぱい覚えるということよりも、変わっていくことにどう対応していくかという力を育てるというふうに学校教育も変わってきて、学校教育を終えて生涯学習に進むときにも、既に固定的な知識をいっぱい持っていることを切り売りしていくのではなくて、自分の経験を生かしていくためには、社会の変化に合わせて学び続けないと変わっていけない。

デジタルな社会になってきて、黒板で字書いていたところから、今子どもたちはパソコンで勉強しているというような状態の中に、自分も合わせていかなければならない。学び続けていかなければ、この知識・経験を生かせないということで、変わっていく必要があるということ、そしてもう一つは、学校教育を終えても、あるいは自分の子育てや生活のために必要があって学んできたということ以外にも、これからは高齢化していくため、まだ社会に役立たなくてはいけないし、求められているんだ、求められていることを生かすためには、自分もますます学んで変わっていかねばならないんだということを一定の年齢層の方たちにも、あなたは求められていますよと。そのためにはやっぱりそういうことを、そのことをどういうふうに伝えていくかという方策はいろいろあると思うが、何を伝えていくかというときに、求められています、だから勉強、世の中に合わせて学び続ける必要もありますということを伝えていくということが、また頑張ろうかなとか、もっと学ぼうかなというモチベーションになっていくかなと考えている。

○安田委員

高齢期の生きがいをつくることとか、健康を増進したり体力づくりをしたりすること、余暇や自由時間を有効にする、生活を楽しむ、心を豊かにする活動をする、ボランティア活動などをして社会に貢献することがコロナ後に減っている。

子どもを通して親たち、そして祖父母の経済状況を知ることが多いけれども、実はこの状況下で家庭の状況、経済状況が変わった人たちが増えてきているというのを痛感している。そういう方々にとって、この生涯学習の学び

というのは、どういうものかというのを考えていかなければいけないのかなと思う。余裕がない人たちが、置き去りにされてはいけないと思う。そういう人たちにとっても学びを提供していくためには、孤立感を生まないようにするか、次の経済に、雇用に生かせるようなスキルアップをすることか、テーマを細分化して提供していくことが大切だと感じる。

○一戸委員

人との出会いは、すごく大事なのかなと思った。学びの中で、出会いと憧れが人を変えるという言葉があって、ここ数年子どもたちと関わっている中でも、それを感じながら過ごしている。この大人格好いいとか、こんな人がいるんだというところで、ちょっと自分もやってみようかなとかというところの、すごく学びの大きなきっかけだとか、不登校の子供もたくさんいるが、すてきな人に出会ったから出てみようとか、そういうところで大きな学びにつながっていったり、勉強することとか、それをきっかけに知ったり、友達ができたりすることが楽しいというところもあると思う。

○榊委員

南区にある学童絵本のふれあいの会、それから豊平区にある、ねっこぼっこのいえに研究活動でお邪魔させていただいているが、どちらも札幌市の地域子育て支援拠点事業の子育てサロン。そちらの二つの事例は、どちらも多世代ということと、それから赤ちゃんからお年寄りまで、障がいがあってもなくてもということが一つキーワードになっている。

どちらかという、子育て中の親御さんで大変だが、その中で人と出会って、さらにこんなこと学んでみようという、その拠点の中での学びの活動がある。そういうふうに、例えば、ねっこぼっこのいえの事例だが、NPO 法人と協働して、その中で貧困のために塾に行けないお子さんのために、学びの場をその地域のたまりばのようなところで活動できるような取り組みがある。そういう取り組みが広がっていくとより豊かに、そして学べないというふうな生活的に厳しくてというような人たちも、誰も取り残すことなく、その学びの場に、結果的に参加していたのだなというふうなことに繋がっていけばいいなというふうに思う。

○鈴木議長

札幌市図書館を見て、オープン前にも、この社会教育会議の中で見学もさせてもらった。非常に感動した覚えがある。あそこも従来はこういった働き盛りの層に関しては、ふだん忙しいということもあって、学ぶ時間もないとか、そのきっかけがないとか、そういったことが非常に大きなハードルになっているかと思う。こういった中心市街地の中に、ある程度ターゲットを絞って、その関心を呼び起こすような仕掛けをして、それが成功してい

る例かと思う。働く層に関しては、働くを楽にするというキャッチフレーズもあるが、それがやはり琴線に触れて、行ってみたいとか、その層に関心のあるような本とか、そういう受入れというか、相談体制が整っていたため、やはりそういうのが一つの大きな事例にもなるかなというふうに思う。

○出口委員

地域で気軽に学びながら多様な世代が集い、交流を行う地域のたまり場というのは非常に高い数字となっている。その次に学習成果を生かしたい人と、それを求める人や場所とを結びつける人材というものが非常に高くなっていて、特に若い人たちの割合が高いというのはすごく興味深く感じたところ。

実際、このたまり場だとか、それからいわゆるコーディネートが札幌市内でできているのかということを書いていただきたいと思う。

私も先日、市の生涯センターが主催の区民センターだとか、コミュニティセンターの職員対象の研修の場でお話をさせていただいたが、それをやるに当たって、各区民センターがどんなことをやっているのかというのを眺めてみた。区民センターは大体が区に一つぐらいしかない。だから気軽に集ってどうのこうのという場にはなかなかないのではないのかなというふうに思う。区民センターの職員の方がやっている業務内容なども見ても、ここでやっているような、そのコーディネートの役割をやっているのかといったら、恐らくできていないのではないかなと感じる。だからこういうデータが出ているにもかかわらず、これに対して、では市としてどう取り組もうとされているのかというところが、やっぱりこれからの生涯学習をもっと広げていくためには、大事な取組がここに数字として出てきているのではないかな。だからといって、箱物をたくさんつくるべきというような発想ではなく、それこそ空き家などもあちこちにあるわけで、そういった空き店舗も各まちにあるのではないかなと思うので、そういったところを活用するというのも一つの手かなと思う。やっぱり住民のニーズがここに見えてきていると思いますので、そういう場を積極的につくっていくというような取組も、今後検討をいただきたい。

○鈴木議長

市民活動促進のほうで、新たなる活動の場整備事業というので関わらせていただいている。その中で地域の空き家だとか、使っていない建物があるため、そこを整備して、当然オーナーとのいろいろなやりとりの中で調整はしなければいけないが、そういうところでそういった活動の場が広がる。札幌市はすごいと思うが、100%補助で整備事業に補助を出している、助成金。こういった制度もあるので、そういったところとうまく組み合わせをし

ながらいろいろと学校拡大を図っていくと良いと思う。

7 連絡事項

○事務局（逸見係長）

御案内のとおり、今回で2年間の任期の中での最後の社会教育委員会議ということになる。

本日の資料は、事務局のほうにて作成をさせていただき、議長に助言をいただきながら完成させたいと考えている。

○鈴木議長

2年間議長という大役を仰せつかって司会進行を務めさせていただいたが、委員の皆様におかれましては、大変貴重なお時間をいただき、また、たくさんの御意見を出していただき誠にありがとうございました。